

〔巻頭言〕

マレーシアで考えたこと

伴 美喜子

私は今、地方都市の高知で母と二人で暮らしているが、居間には旧暦カレンダーが掛かり、自然豊かな環境の中で旧暦の季節感を体感しながら生活している。裏の庭で芽を出したフキノトウに喜びを感じ、大学からの帰路、空を見上げて月を愛でる。数日前には中国人留学生たちと共に「春節」を祝い、3月には古い町並みを保存する室戸市吉良川町の「ひな祭り」に参加することを楽しみにしている、という具合だ。

日本の文化の核、ルーツとしての「旧暦」を再発見し、「文化」とは展示されるもの、舞台上で演じられるものばかりではなく、庶民の生活のリズムや心のあり方をも含めたものである、と強く意識するようになったのは、マレーシアでの「生活者」としての10年があったからだと思う。

民族のアイデンティティーとしての暦

ご存知のように、マレーシアでは万国共通のグレゴリオ暦（太陽暦）の他に、各民族（各宗教）がそれぞれ、生きる羅針盤としての「もう一つの暦」を持っている。それらは、太陰暦または太陽・太陰暦であるために、祭日を太陽暦に重ねると毎年違った日となる。マレー系や他民族のムスリムは「ハリラヤ・プアサ」や「ハリラヤ・コルバン」を、中国系は「春節」や「中秋節」を、そしてインド系は「ディーパバリー」や「タイプーサム」を民族の暦で祝う。それぞれの民族はこの日、先人たちの足跡を振り返り、その民族であることを再認識する。言わば大切な民族再生、社会教育の日なのである。また、これらの祭日はタイプーサムを除いて、国の祝日ともなっており、その日の主役でない他の民族も主人公たちに敬意を払い、祝福を惜しまない。これがまた、「他者への配慮」を培う社会教育ともなっている。

特に感動的だったのは、1996年から98年まで、3回連続してイスラームのハリラヤ・プアサと中国の春節（農曆新年）が重なった時である。「Gongxi(恭喜)Raya」という新語も生まれたほどで、私は、この32年に一度起きる宇宙の現象を「文明のランデブー」と呼んだ。

自、他との区別をしっかりとした上で、共に手を携えるという、マレーシア型多民族国家のあり方の基本を見る思いがした。

色鮮やかでパワフルなマレーシアの祝祭日に比べ、日本の祝祭日は何と色褪せてしまったことだろう。休日の意義は疎まれ、忘れられ、経済効果やレジャーのみを追いかけて、国中がこぞって「利便主義」に陥っている。

日本は長い間中国から取り入れた暦を改良して使用してきたが、明治5年（1876年）11月9日に旧暦を廃止し、新暦（太陽暦）を採用した。この「晴天の霹靂」とも言える「改暦」は明治政府の「財政難」が引き金だったという面白い話があるが、それは兎も角、後進

のアジアの国々にとって、近代化の過程で「時の文明開化」－「改暦」は避けて通れないことだった。

興味深いのは、他のアジアの国々はマレーシアのように古い暦を残し、新暦と併用しているのに、日本だけ(?)は公式的に旧暦を捨て、祭日新暦に読み替えて、祭日を固定したことである(イスラームの断食明けや春節は毎年日が変わるが、日本の元日、桃の節句、などは固定されている)。そのことによって、日本は「農耕文明」、情緒や曖昧さと決別し、7千年に一日の誤差しか生じない「精密さ」を有する太陽暦の世界、即ちアングロサクソンの文明に仲間入りしたのであった。

しかし、21世紀に入った現在、嘗て続いた農耕文明に基づく旧暦を切り捨てたことが、果たして正しい選択であったかどうか。私は今、「暦」をキーワードにアジアの文化や近代化の歴史を読み返してみたいと思っている。

多言語社会のコミュニケーション

多言語社会のあり方を考えるとき、思い出す風景がある。開設されたばかりの国際交流基金(The Japan Foundation)クアラルンプール日本文化センターに着任して間もない頃だった。日本・マレーシアの漫画界を代表する二人の漫画家、サトウ・サンペイ氏とLAT氏の講演会が開催された。今、KLの国際交流基金はニッコウホテルの隣のMenara Citibankにあるが、当時(1990年代前半)は後にKLタワーが建った、Bukit NanasのWisma Nusantaraビルの地上階にあり、9.11事件の前でもあったので、気楽に立ち寄ってもらえる場所だった(Off Jln P. Ramleeというアドレスもよかった)。100人近く収容できるホールには、マレーシアの漫画愛好家や在留邦人が詰め掛け、熱気に溢れていた。

LAT氏の漫画のような話が忘れられない。

「日本で、ある財団に表彰され、授賞式に出席した。役員の一人が、マレーシアが多民族であることを知ってのことだろう、『Which tribe are you from?』と声をかけてくれた。」爆笑・・・(LATさんの漫画そのもののような容姿を知っている方はニヤリとされるだろう)。続いて、日本のお風呂体験談、そして自分が「RATさん!RATさん!」と親しみを込めて呼ばれたことなどを気さくに話してくれた。日・英の通訳もいたが、このような話は翻訳を聞いても面白くもおかしくもない。

英語があまり出来ず、マレー語で質問をする「カンボン」の若者もいた。そのうち、いつの間にか使用言語は英語、日本語、マレー語の3カ国語チャンボンとなってしまったが、みな、話の2/3位理解して、結構満足げに帰って行った。

その時、私は合点した。これが多言語社会での、「コミュニケーションのかたち」なのだ。と。すべてを翻訳したら、時間も紙面も費用もかかる。第一、翻訳したら、原語のニュアンスが伝わらない場合もある。100%わからなくても、不安に思うことはない。その代わり、色々な言語を少しでもかじっておくと、コミュニケーションがうまくいくし、楽しい思いをする。

私の大学には4,50人の留学生がいるが、日本語の学習段階によって英語と日本語の組み合わせを変え、時には中国語を交えてチャンボンで意思疎通を図っている。また、中国とのコミュニケーションは英語に一元化するのではなく、出来るだけお互い共通の「漢字文

化」を生かすように心掛けている。

今、世界中が多言語的な環境になりつつある。日本の中でも、英語の他、中国語や韓国語の表示が急速に増えていることに驚く。もう、英語だけで済まされる時代は終わっている。21世紀を生きる若者は言語的チャンポン時代のスキル、センス、ユーモアを身につけなければ、世界から仲間外れになってしまうよ、と学生たちを激励している昨今である。

食文化を見直す

マハティール前首相の義姉に当たる Kakak Saleha (Tan Sri Dr. Saleha Mohd Ali) と東京で二日間を共にしたことがある。一晩ある企業のご招待による夕食会があり、私も付き人を装って同席した。高級料亭だったので、次から次へと手の込んだ料理が運ばれ、その都度、仲居さんが長々と解説をするのだった。「これは、〇〇の〇〇でございまして・・・、器は・・・」すると Kakak は私に小声で言った。「So what!」(それがどうしたと言うの?) 余り技巧を凝らした不自然な物はお気に召さなかったようだ。

「こんなに次から次へ贅沢なもの出してきて、勿体ないわ。私はナシ・ゴレンがあれば充分よ。それより、もっと会話を楽しみたいわ。この人たち、話題もない・・・」マレー語だったので、周りにはわからなかったはずだが、この些か我儘とも取れる発言は日本文化の本質や日本人に対する鋭い批判だと思った。

彼女がそこまで思ったかどうかはわからないが、マレーシア人だったらこんなふうに見えるかもしれない。

「私たちの国には『クンドゥリ』という文化があります。高価な食べ物ではないけれど、嬉しいことがあった時、みんなで作って、みんなで分け合って食べます。つまり、『食』を通じて『喜び』を周りの者と分かち合うのです。

食べ物の大切さ、有難さを噛み締める『断食』という文化もあります。その時はこの同じ地球上で『飢えている』人々にも思いを馳せるのです。

マレーシアでは『食』は家族や共同体をつなぐ大切な文化であり、『何を』よりも『誰と』が重要なのです。」

日本では、若者のファーストフードや冷凍食品依存が問題になる一方、異常とも思えるグルメ嗜好が蔓延している。「おいしーい！」と大きな口を開けた姿が大写しになるグルメ番組の数々、氾濫する食べ歩き情報・・・、外国人には欲望丸出しの醜い姿に映るかもしれない。最近「食の安全」が問われる事件も数多く起こっているが、日本は何か大切なものを見失ってはいないだろうか。もう一度共同体社会生活の潤滑油としての「食」について考え直して見たい。

SAMARITANISM (他者へのシンパシー) を問う

この冬、春節を前に中国の南方各地は雪害に見舞われ、多くの人が苦しんだと言う。50年ぶりの出来事で、広州などの駅は里帰りをする人々が足止めを食らって大混乱に陥り、これまで雪や氷を見たことのない人たちが、積雪や停電で被害を受けたそうだ。ところが日本では、「中国冷凍ギョーザ事件」で大騒ぎをし、このことへの関心はあまり払われなかった。私自身も大勢の中国人留学生を預かっているのに、東京のホテルで CNN の中継番

組を見るまで、この「大事件」を意識していなかった。高知に戻った私は「中国では大雪で大変ね。故郷のご家族は大丈夫？」と声をかけるようになったが、「中国冷凍ギョーザ事件」の過剰報道と隣国の災害に対する関心のなさはあまりにもアンバランスではないか！
私はふと、9年前に書いた文章を思い出した。

.....

それは阪神大震災が起こった1995年1月のことであった。事件から何日経った日だったかは覚えていないが、あるパーティーで、国立美術館館長のPuan Wairah bt Marzukiに会った。私はいつものように、「How are you?」と在り来たりの挨拶をした。すると、どうだろう、相手からは意外な返事が返ってきたのだ。

「落ち込んでいるわ」

あまりにも浮かない顔をされていたので、思わず、

「えっ、お体のお具合でも悪いんですか」と聞き返した。

「そうじゃないの、神戸の地震・・・」

私はそれでもピンと来ず、重ねて聞いた。

「えっ、神戸に誰かお知り合いの方でもいらっしゃるんですか」

「そうじゃないけど、とても悲しいじゃない・・・」

私はあの時ほど自分の愚かさを感じたことはない。阪神の震災に対し、この日本人以上に悲しみと同情を寄せておられたPuan Wairahを前に、私はなんと浅はかなことを一度ならず、二度も言ってしまったのだろう。今考えても、冷や汗が出る思いである。

私の驚きはこの一件に留まらなかった。事件から一週間後、教育省傘下の教育管理研究所所長のIbrahim Ahmad Bajunid氏（同氏はJAMS会員のOmar Farouk氏の兄）より一通の手紙が国際交流基金KL事務所に届いた。ほかの用件は全くなく、純粋に日本で起きた大惨事に対し、見舞いの気持ちを伝えるものであった。

1月末にマレーシア戦略国際問題研究所(ISIS)日本研究センターに対する経団連の助成調印式があったが、ここでもStephen Leong所長の呼びかけで200人あまりの出席者が数分間の黙とうを捧げた。

マレーシア人の暖かい心と日本への親しみを示すこの出来事は、あれ以来私の心に強く焼きついている。

.....

因みにタイトルで使った「Samaritanism」（「隣人愛」と訳される）という聖書の言葉はKLで、インドネシアの知日家Arifin Bey氏に教えてもらった。

「ルックイースト政策」の文化的意義

マレーシア西海岸のマラッカ。マラッカ海峡が一望できるセントポールの丘には16世紀にポルトガル人によって建てられた教会跡があり、宣教師フランシスコ・ザビエルの像が建っている。ザビエルは1549年に日本にも布教に来たが、来航のきっかけになったのは薩摩からマラッカに流れ着いた「アンジロウ」との出会いだったと言われる。「西力東漸」の幕開けを象徴する歴史のひとつである。

マレーシアと南の国境を接するシンガポール。1942年2月15日、パーシバル将軍に率

いられたイギリス軍は日本軍に降伏した。日本側の山下奉文将軍(高知県出身)は「降伏するのかないのか、YES or No?」と迫ったと言う。アジアの人々にイギリスが無敵でないことを見せつけた歴史のひとコマだった。

世界史を眺望したとき、近現代の約 5 百年は「欧米にしてやられた時代」(藤原正彦著『国家の品格』p. 12)、世界が欧米に支配された時代だったのではないだろうか。

第 2 次世界大戦後、アジア・アフリカの国々が次々に独立したが、近代化のモデルは欧米に求められた。日本も含め、非西洋の国々は「ルック・ウエスト」の道を歩んできた。

そして今日、アジアの国々が目覚しく興隆していく中で、グローバル化が加速している。市場原理、IT、英語、食生活、ファッション……。それは「発展」を物語るものであると同時に、世界規模での文化の「均質化」(欧米化)を意味する。

マレーシアの第 4 代目首相、マハティール前首相は 1981 年の就任と同時に「ルック・イースト」政策を打ち出した。マレーシアという発展途上国を近代国家、工業国家に発展させるためには、欧米先進国ではなく日本や韓国などマレーシアの「東」にある国々に学ぼうという政策であり、同政策は現在も続いている。アジアの国がアジアの中にモデルを見出したこと、そして日本がそのモデルとなったことの世界史的な意義は大きいと思う。

1990 年代、私がマレーシアに滞在していた頃、「アジアのルネッサンス」、「文明の対話」などの言葉がよく聞かれた。言うなれば非西洋文明の自己主張であったが、1997 年に東南アジア地域を襲った経済危機で一時影を潜めて、今はどうなっているだろうか。グローバル化の時代だからこそ、アジアはより真剣に、より深く、お互いを知る必要があると思う。

以上、私がマレーシアで体験したこと、考えたことのいくつかをご紹介したが、最後に 1990 年代のマレーシアの印象を三つの言葉で表現したい。

A Caring, Sharing & Daring Society

閉塞感や不透明感が漂う日本は今、マレーシアから多くのことを学べるのではないだろうか。若い方々がこれからもどんどんマレーシアに出かけて行き、観察し、体験し、そして自分の頭と心で考えて欲しいと願っている。

(2008 年 2 月記)